

モーツァルトを読む



jscrip ter

Foreword

この文は、2007年9月から2008年1月に掛けて小林秀雄の「モーツァルト」について「日曜プログラマのひとりごと」に書いた記事を時系列にまとめたものである。Webでは他の記事が間にたくさん混じっているし、結果として記事はばらばらに配置されている。クリックして順に読めるようにしても著者自身でさえ読みにくいと感ずるので、自分自身がまとめて読み返すために編集した。読者がいるとすればだが、読者の便宜を図ることになればうれしい。

9/22/2007 (Sat.)

[本] 言葉と物 LXIII - モーツァルト

具体的なテキストを解説するという作業を試してみようと思い立った。人の書いたものを単に流し読みだけで一生を終えるわけにもいかないからだ (^;) 構造主義的に、あるいはフーコーの「知の考古学」(ポスト構造主義)的に読むということはどのようにするものだろう。最近では修練のせい、か、「知の考古学」のテキストが脳に滲みってくるようになった。実際のテキストについて様々な方法を試せば、理解も深まるだろう。テキストに選んだのは、小林秀雄(1902-1983)の「モーツァルト」(昭和二十一年七月『創元』、1946年)である。小林秀雄著「モーツァルト・無常という事」(新潮文庫、昭和36年)の最初に収録されている。この本は昭和42年に7刷で改版され、僕が持っているのは昭和52年の第24刷だ。表紙の裏カバーには「小林批評美学の集大成であり、批評という形式にひそむあらゆる可能性を提示する『モーツァルト』、・・・」と書かれている。180円也。

小林秀雄の批評・評論には、自分の感覚的経験に立脚して書かれた場面が出てくる。そこが少し独特の印象を与え、泥臭くもあるが、身近に感じる。

早速始めよう。「モーツァルト」は登場人物が多彩である。ゲーテ、ベートーヴェン、ニーチェ、ワグナー、スタンダールなどが主要人物となる。まず、SIMILEのTimelineで年表を作ってみた。今のところ作者を含めた登場人物の生没年をWikipediaへのリンクとともに示したに過ぎない。年表の青い帯をクリックして、ポップアップしたボックスの人物名のリンクをクリックするとWikipediaにつながる。→ [年表: 「小林秀雄: モーツァルト」篇](#)

モーツァルト(1756-1791)が生きた時代はカント(1724-1804)の時代と重なり、フーコー流に言えば、18世紀末の古典主義時代から近代へ移り変わる直前の時代である。[年表: 「言葉と物」篇](#)の登場人物と重なるのはニーチェ(1844-1900)ただ一人である。

次に、本文に示されるモーツァルトの楽曲をリストアップしておこう。楽譜の一部が掲載されているものには(楽譜)と表示している。[nn-mm]は節と段落番号を示す。

1. [ドン・ジョヴァンニ](#): [1-9]; [6-2]; [10-13]; [11-1]; [11-12]
2. ト短調シンフォニー(楽譜) ← 第40番、K. 550: [2-1]; [2-2]
3. 一七七二年の一群のシンフォニー: [6-1]; [6-2]
4. 六つのクワルテット(その最初のもの、K. 387) ← 「ハイドン四重奏曲」: [6-4]; [6-5]
5. [フィガロの結婚](#): [6-5]; [10-12]; [11-1]
6. ト短調クインテット、K. 516(楽譜): [9-4]
7. ピアノ曲(特にどの楽曲とは指定されない): [10-1]
8. 三十九番シンフォニー(楽譜): [10-6]
9. divertimento(特にどの楽曲とは指定されない): [10-6]
10. 四十一番シンフォニー(楽譜): [10-7]
11. ハ調クワルテット(K. 465) ← ハ長調「不協和音」、 「ハイドン四重奏曲 第6」: [10-9]
12. [ヨジ・ファン・トゥッテ](#): [10-16]

13. 最後の三つのシンフォニー: [11-1]

14. [アヴェ・ヴェルム](#): [11-10]

15. [魔笛](#): [11-10]

16. [鎮魂曲](#): [11-14];[11-15]

楽しみは、これをネタにオーディオ・音楽鑑賞の習慣を復活させようということにある。人間は習慣の動物である。それもちよとしたきっかけが習慣を形作るのである。最後の三つのシンフォニーは、ベームとウィーン・フィル(1976)で40番と41番、スウィトナーとスターツカペレ・ドレスデン(1974-1975)の組み合わせで39番と40番が見つかった。ハ調クワルテットは、アルバン・ベルク・クワルテット(1977)の演奏を持っていた。いずれもLP。最近思うのはコンピュータからコントロールできるオーディオシステムがないかなということ。レコードプレーヤがある以上、全自動ということはあるが得ないのだが。全部、MP3ファイルに変換してiTunesで聴くというのも元オーディオマニアにとっては味気ない感じがして気が進まない。

もう一つの展開の可能性は、音楽も記号で表されるがゆえに、一種の言語であることにある。楽譜はラングであり、演奏はパロールということが出来るかもしれない。止め処なく広がる人間世界を再把握するという無謀ではあるが永遠不断の営みを止めることはできない。

- [小林秀雄 \(批評家\) - Wikipedia](#)
- [ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト - Wikipedia](#)
- [モーツァルトの楽曲一覧](#)

更新: 2007-12-02T18:34:29+09:00

9/23/2007 (Sun.)

[\[本\]](#) 言葉と物 LXIV - 「モーツァルト」読解 第1節

リアルタイムの読解なので、話は前後することも多くなるが、思いついたことはまず記録する手順で進める。

「モーツァルト」の構成(「モーツァルト・無常という事」新潮文庫、昭和52年24刷、7-59ページ)を簡単にまとめておこう。タイトルに続いて「母上の霊に捧ぐ」という短い献辞のあとに、11の節が並んでいる。簡潔に数字が打たれているだけだ。

第1節は9つの段落に分かれている。以下、第1節第1段落を[1-1]のように表示する。

[1-1] 最初の段落に、エッカーマンの「ゲーテとの対話」からゲーテがモーツァルトについてどのように考えていたかが書かれている。1829年12月6日、日曜日に「・・・デーモンというものは、人間をからかったり馬鹿にしたりするために、誰もが努力目標にするほど魅力に富んでいてしかも誰にも到達できないほど偉大な人物を時たま作ってみせるのだ、・・・音楽における到達不能なものとして、モーツァルトをつくりあげた。・・・」(エッカーマン著、山下肇訳「ゲーテとの対話(中)」、岩波文庫、赤409-2、1968年、140ページ)とあるのがその部分である。

[1-2] エッカーマンとの対話当時、80才のゲーテが[ファウスト](#)の第二部を苦吟していたことが記されている。ファウストの第二部はゲーテの死の翌年、1833年に発表される。ここで、小林秀雄はゲーテがモーツァルトの美しい音楽を聴いてどのような悩みをいただいていたか想像してみることを誰にでもなく提案している。

[1-3] ベートーヴェンの話に転換する。トルストイの『クロイツェル・ソナタ』とゲーテの逸話となったベートーヴェンに対する沈黙が対比される。

[1-4] ゲーテのベートーヴェンに対する沈黙の解釈について、ロマン・ロランの「ゲーテとベートーヴェン」が紹介される。小林秀雄は、神童モーツァルトの演奏に酔ったゲーテの耳を理由とするロマ

ン・ロランの結論は必ずしも必要ではなく、書の内容から様々な想像ができることを示唆する。

[1-5] メンデルスゾーンが、ゲーテにベートーヴェンのハ短調シンフォニーをピアノで弾いて聞かせたときのゲーテの興奮・困惑ぶりを述べる。おそらく、「ゲーテとベートーヴェン」に書かれていることに基づくと思われる。

[1-6] ゲーテがメンデルスゾーンの演奏から何を聴き取ったかということについて、ワグナーの「無限旋律」を聴いたニーチェとのアナロジーにおいて捉えている。「・・・二人とも鑑賞家の限度を超えて聞いた。もはや音楽なぞ鳴ってはいなかった。めいめいがわれとわが心に問い、苛立(いらだ)ったのであった。」(9-10 ページ)

[1-7] ニーチェがワグナーをなぜ嫌ったか、ゲーテがベートーヴェンをなぜ嫌ったかが、同様な天才の独断として語られる。最後に「・・・尤(もっと)も、浪漫主義を嫌った古典主義者ゲエテという周知の命題を、僕は、ここで応用する気にはなれぬ。この応用問題は、うまく解かれた例(ため)しがない。」(10 ページ)と述べる。ベートーヴェンはWikipediaに見られるように、古典派の作曲家だが、古典派とロマン派の橋渡しをしたとされている。時代的にも古典主義時代から近代の狭間に生きてるのが興味深い。フーコーには絵画への言及はあっても音楽へはない。

[1-8] 哲学者ニーチェと芸術家ゲーテとの対比。ゲーテの冒頭のモーツァルトについての考えに戻る。

[1-9] 元のエッカーマンとの対話の話に戻る。モーツァルト亡き後、ゲーテのファウスト第二部の音楽化の夢について小林秀雄の空想が語られて、第1節が終わる。

[松岡正剛の千夜千冊『ヴィルヘルム・マイスター』\(全6冊\)ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ](#)によれば、「ゲーテとの対話」はニーチェにとっても重要な書だったようである。ぼくがこの書を持っているのは、齋藤孝著「座右のゲーテ」(光文社新書、2004年)にあるゲーテの技法に興味を持ったからである。ゲーテなんて古すぎると思うのは考えが浅すぎるといべきだろう。第1節はモーツァルトというよりはゲーテを中心に、そしてニーチェを脇役として展開されている。解くべき謎は、ゲーテがなぜベートーヴェンに対して沈黙し、モーツァルトを好んだかということである。

一つの言語作品には、編章節項のような複数の段落の括りの構造がある。「モーツァルト」の場合は一重の構造しかなく、比較的短いので節とした。段落単位で筋を追うことで、まず全体の大まかな構造と同時に細部の要点を捉えていく。フーコー流に考える場合には、「言説」と「言表」という用語がまず頭に浮かぶのだが、その応用についても追々考えていこう。

更新: 2007-09-23T18:59:58+09:00

9/27/2007 (Thu.)

[\[ミシェル・フーコー\]](#) 言葉と物 LXVI - 分析モデル

「モーツァルト」の読解をスタートさせたが、少し寝かせて熟成させる必要もある。再開する前にフーコーの方法を見よう。「J=P・リシャールのマラルメ」(1964年:「フーコー・コレクション 2 文学・侵犯」、ちくま学芸文庫、2006年)の次の部分。

文学作品を語るためには、現在いくつかの分析モデルが存在している。論理的モデル(メタランゲージ)、言語学的モデル(意味の諸要素の定義と機能)、神話学的モデル(神話物語の諸セグメントとそれらセグメントとそれらセグメント間の相関関係)、フロイト的モデル。かつては他にも多くのモデルが存在したし(修辞学的モデル、解釈学的モデル)、これからあらわれてくるモデルもあるだろう(おそらくいつかは情報科学的モデル)。しかしどんな折衷主義でも、これらをかかわるがわる使うといったことを受け入れることはできない。そして文学研究が、すべてを包括するモデルをまもなく発見することができるかどうか—あるいはひとつとしてモデルを使わない可能性を発見することができるかどうか—はまだ誰にもわからない。

1964年当時に、情報科学的モデルのようなアイデアを想定できたというのはすごいと思う。しかし、それは未だに見果てぬ夢なのかもしれない。

更新: 2007-09-27T21:27:48+09:00

9/28/2007 (Fri.)

[\[TV\]](#) 言葉と物 LXVII - 爆問学問

「爆笑問題のニッポンの教養」([TOP](#)) ネタ。ほ一、NHK か。慶應大学篇。慶應8人の論吉チルドレン。聞き取り断片メモ。

登場人物と発言、村井純(情報工学)「驚異のデジタル世界がやってくる」「人間の創造性を刺激していく」「慶應生が未来を作っている」、中村 伊知哉(メディア学)、石川幹子(環境デザイン)、柳川弘志、国分良成(現代中国論)「中国人は恋人同士が英語でしゃべっている」、清家篤(労働経済学)「高齢化、2030年には65才以上が1/3になる」「高齢化社会のモデルを日本が作れるか」、岡野栄之(脳科学・再生医療)「高齢化においては、体が元 気なのに心や脳がついていけない」、末松誠(代謝生化学)「腸はsecond brain」「体の中はデジタル化できない」、山岸俊男(北大)、田沼誠一(東京理科大、生化学)、遠藤秀紀(京都大学、遺体科学)、浅島(東京大学、再生医療)、安西祐一郎(慶應塾長)「ラグビーでもう倒れるかどうかというところになると涙が出てくるが、このような感動を味わえる社会はよい社会ではないか」。

30年で世界は変わる。ユービキタス、バーチャル、ロボット。デジタルの網の目から零れ落ちるものもある。デジタル化、それって幸せ? 筋肉を支えるテクノロジーから脳を支えるテクノロジー。デジタル化で考える。どう生きてどう死ぬか。グローバル化によって、ローカルで孤立して生きることができなくなる。競争することは幸せではないが、競争するように作られている。そういう心の仕組みをもった動物なのである。・・・えーっ、ほんとうにそうなのと疑問に思ったり、証明できているんだろうか、どんなふうにして証明するんだろうとか・・・

- [村井純 - Wikipedia](#)
- [IchiyaNakamura](#)
- [Ishikawa Lab.](#)
- [柳川弘志 - Wikipedia](#)
- [国分良成 研究会](#)
- [Seike Seminar's Homepage](#)
- [岡野栄之 - Wikipedia](#)
- [末松誠 - Wikipedia](#)
- [山岸俊男 - Wikipedia](#)
- [Hideki Endo TOP](#)
- [安西祐一郎 - Wikipedia](#)

「教養」とは何か。[教養 - Wikipedia](#)によれば、知識を有し、知識を活用する能力と定義できるかもしれない。「モオツァルト」を読んで理解するためには、かなりの知識が必要になる。無論、何を目的に読むのかという問題はあるのだが、作者、登場人物、引用される書物、楽曲や楽譜、時代背景などに関する知識が読解を助けるだろう。通常の本では理解を助けるために文脈に載りにくい付加的情報などを脚注などで示す場合もあるわけだが、「モオツァルト」には注はない。作者としては、作品の中ですべてを表現し尽くすことを目的として書いているので、作者の注があるのは例外的であることが普通かもしれない。

Web ページでは、関連用語等へのリンクを記述できるようになった。作品の背景に広がる世界へつながる道を指し示すことが容易にできる。適切なリンクの張り方のような教養が求められる時代になっ

たのかもしれない。

更新: 2007-09-30T09:04:21+09:00

10/10/2007 (Wed.)

[\[日記\]](#) 言葉と物 LXX - 狂気の歴史を手に入れたが・・・

今朝の外気温は20°Cと、この秋最低を記録。帰りは24°C。ラジオが今日は最高気温27°Cだったと告げる。RCCのバリシャキNOW。偏西風が下がってきているので秋が定着するだろうと今朝もラジオが言っていた。ノーベル賞が話題に、文学賞は今年は詩人になるという噂で、ル・クレジオも候補に上がっているらしい。へーっ、詩も書いているのかねえ?!詩と散文の区別も難しいのだろうけど・・・クレジオと詩で検索してみると、最近、日本でもリバイバルの感じがあるね。詩と直接の関係がある記事はないが。

フーコーの「狂気の歴史」も既に手元にあるが積読に近い状態だ。書き方としては「言葉と物」に近い感じ。原註の数は「言葉と物」と比較して1-2桁多い。スウェーデン、ウプサラ大学ヴァーレル文庫の西洋医学の包括的な蔵書が元になっていると言われる(中山元著「はじめて読むフーコー」、洋泉社、新書y 104、2004年、27-29ページ)。どのように読解したのかは、入力を理解しないと全容がわからないことは自明である。現在であれば、コンピュータに支援させて検証することも可能だろうが・・・

- 更新日記記事の「狂気の歴史」検索結果
 - [\[ミシェル・フーコー\]言葉と物 XVII - 歴史と知の考古学](#) (2007/05/19)
 - [\[歴史\]言葉と物 LIX - 年表](#) (2007/09/16)
 - [\[ミシェル・フーコー\]言葉と物 LXVIII - 言説と言表](#) (2007/09/30)

「モーツァルト」読解は、「ト短調クインテット」(K. 516)と「ドン・ジョヴァンニ」のハイライト部分のCDをEMI CLASSICSで入手して聴いたりしているところ。[言葉と物 LXIII - モーツァルト](#)、[言葉と物 LXIV - 「モーツァルト」読解 第1節](#)。この読解にせよ、単に一つの短い作品を読むに過ぎないのだが、分析しつくすことは叶わないだろう。

最近入手した本。フーコーの思索の基盤となったニーチェの「道徳の系譜」(岩波文庫、1940年)。[加藤 文元](#)著「数学の精神」(中公新書、2007年)、これがちょっとおもしろい。39才の著者(現時点で39才かどうかは知らない^^;)。それから、チョムスキーおじいちゃんの「お節介なアメリカ」(ちくま新書、2007年)。元気だよ。

更新: 2007-10-11T21:25:31+09:00

10/14/2007 (Sun.)

[\[本\]](#) 言葉と物 LXXII - 音楽家訪問

今日(日を跨いでしまった、土曜のこと)は出勤。月曜日に使う資料を集中して整理して10個ぐらいのPDFファイルになんとかまとめた。昼休みも食事をしただけで作業を続けたので、5時前に完了。定時の終業前にさっさと帰宅することにする。帰宅時の気温は21-22°C。だいぶ下がってきたが、夏日で昼間はやはり暑い。今日のネタは、アラン著、杉本秀太郎訳「音楽家訪問 ---ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ---」(岩波文庫 青 656-1、1980年第1刷、原著:1927年)。

ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ10曲が10章に割り振られた音楽解説小説である。小林秀雄の「モーツァルト」([言葉と物 LXIII - モーツァルト](#))にも極短い楽譜が示されるが、「音楽家訪問」は楽譜がかなり多く示される。アランは、本名は[エミール=オーギュスト・シャルティエ](#)と いい、

Wikipediaには本名でページができています。ピアノやヴァイオリンが演奏でき、作曲さえできたそうなので、このような作品が書けたのだろう。この本が書棚にあるのは、ベートーヴェンを聴くときに読めば楽しいだろうと、昔昔、オーディオマニア時代に思ったことがあったからだ。「モーツァルト」にもクロイツェルソナタの話が出てくる。

更新: 2007-10-14T00:48:21+09:00

11/6/2007 (Tue.)

[\[批評\]](#) 言葉と物 LXXVII - 「モーツァルト」の知の構造

「モーツァルト」の読解編が進まない。それでも何か書かないと切り開けない。

「読解するためには、何が書かれているか理解する必要がある」などと当たり前のことを書いてみる。何が書かれているか、理解するためには書かれていることを要素に分解して、一つ一つの要素について説明できる必要があるなどと、当たり前のことをさらに書いてみる。

おそらく、書かれていることを理解するための要素としては、固有名詞がまず重要だろう。固有名詞を抽出するかな。まあ、そんなことを考えながらウロウロしている。忙しくて、作業は進まないというべきか。どのように要素を取り出してまとめるかというようなことを考えている。これはある意味、書かれているものの構造の枠組みの一部を取り出すことに相当するだろう。ただ、要素を取り出しても、それは書かれたもののなかであってこそ、意味を持つ。取り出して どうするということになる。

第2節の最初には、楽譜の一部が置かれている。Allegro assai とあるので、ト短調シンフォニー(交響曲 第40番 ト短調 KV. 550)の第4楽章の冒頭の部分らしい。街の雑踏の中で著者の頭の中で誰かが実際に演奏したように鳴ったのである。楽譜の部分が何がか特定できたからといって、何も理解できたことにはならないのではあるが・・・

書かれていることと知識とはどのような関係にあるかについても考えている。書かれていることは知識に分解できるのか。

まあ、いろいろと実験してみるとおもしろいだろう。

更新: 2007-11-06T23:31:20+09:00

11/7/2007 (Wed.)

[\[日記\]](#) 言葉と物 LXXVIII - 小林秀雄の知の構造

風のざわめきが波打ち際のざわめきに変換され、防波堤の狭い頂点を辿る僕を追い落とそうする。自然の秘密を覗き見するのを非難するかのように耳元で 風が唸っている。浅い海は透明で、海藻の繁茂する緑の領域と砂地の明るい土色の領域が分かれて大柄の模様を作っている。海面の揺らぎが複雑で滑らかな凹凸のレンズを生み出し、目を凝らして海底まで見通そうとする視線の邪魔をしている。今日はよく晴れて、気温は22°Cぐらいまで上がったらしい。

ふと、小林秀雄の「作家の顔」(昭和36年、1961年)という評論集を手にとって読み始めた。「ニーチェ雑感」(昭和25年、1950年)という題だが、僕の蔵書にはニーチェの「善悪の彼岸」と「道徳の系譜」が最近加わっている。これは、フーコーを読み解くための読書の一環である。フーコーはニーチェとハイデガーを出発点としている。「ニーチェ雑感」には「ショオペンハウエル」がニーチェの出発点として登場する。また「ニーチェ雑感」においても音楽が登場する。それは「モーツァルト」(昭和21年、1946年)の変奏のようにして。

- [ミシェル・フーコーの旅 \(2007/03/16\)](#)
- [ミシェル・フーコーの旅 II - ニーチェと系譜学 \(2007/03/18\)](#)
- [言葉と物 XXXIII - 図書館通い \(2007/06/09\)](#)
- [言葉と物 XXXXIV - 人間は進歩してきたのか \(2007/08/05\)](#)
- [言葉と物 XXXXV - 思索の透視図 \(2007/08/13\)](#)
- [言葉と物 XXXXVII - 構造主義とは何か \(2007/08/18\)](#)
- [言葉と物 LXIII - モーツァルト \(2007/09/22\)](#)
- [言葉と物 LXIV - 「モーツァルト」読解 第1節 \(2007/09/23\)](#)
- [アルトゥル・ショーペンハウアー - Wikipedia](#)

更新: 2007-11-08T00:27:35+09:00

11/9/2007 (Fri.)

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXIX - 「モーツァルト」読解 第2節

朝は12°C、帰宅時は16°Cだったと思う。後のほうは確かだ。明日はまた気温が上がるみたいだ。なんとか予定通りの仕事をこなして帰宅したが。昨日 入った想定外の問題への対応で、時間的には大幅遅れ。お疲れさ。仕事の並列处理的連携プレーを切らすわけにもいかないし、とにかく最後のボールを渡せ。相手は有能だが、まだストーリーの全体像を知らない。時間切れは迫っている。お誘いが掛かっていたミーティングにも出ることは叶わず、申し訳なし。

「モーツァルト」読解シリーズの第2回。夾雑物がだいぶ混じってしまったが、なんでもありの思いつき、お得意の場当たり仕事のお手本なんだ。しかし、美味しそうなものを嗅ぎ出す能力はある。そう、第2節がト短調シンフォニーの第4楽章冒頭の楽譜に始まることは既にも書いた。第2節は小林秀雄のモーツァルト体験談である。小林秀雄得意の私小説的批評。

第2節は四つの段落に分かれている。

[2-1] ト短調シンフォニーのテエマが頭の中で鳴った。

[2-2] モーツァルトの肖像画の話。[2-4]でヨゼフ・ランゲが一七八二年に書いた絵だと言及がある。「ニーチェ雑感」の発狂したニーチェの写真を切り抜いて大事にしていた話から、この部分を連想した。モーツァルトの音楽の性質について。たくさん引用したいが抑えておく。

・・・世界はとうに消えている。ある巨(おお)きな悩みがあり、彼の心は、それで一杯になっている。眼も口も何の用もなさぬ。彼は一切を耳に賭けて待っている。耳は動物の耳の様に動いているかもしれぬ。が、頭髮に隠れて見えぬ。ト短調シンフォニーには、時々こんな顔をしなければならない人物から生まれたものに間違いはない、僕はそう信じた。・・・

[2-3] モーツァルトの音楽の性質について、その二。

[2-4] モーツァルトの音楽を自分が解っているのかどうかという自問。

ショオペンハウエルが、カントの「批判」から立ち上がったのは周知の事であるが、この点で、ニーチェは特色ある洞察を述べている。カントによって厳密に証明された知性の相対性を、いろいろと弄くり廻している様な「計算機械」達には自分は何の興味もない、何故絶望しないのかと彼は言う。・・・

(「作家の顔」、新潮文庫[草]七B、1961年、1970年改版、251ページ;「ニーチェ雑感」、新潮、1950年)

小林秀雄は「ニーチェの愛読者」（「ニーチェ雑感」、254ページ）であり、上記引用部分のニーチェの洞察を「善悪の彼岸」と「道徳の系譜」に立花 隆流の超速読で探してみたが、見当たらない。パスカルやデカルトへの言及部分に近い記述はあるようには思ったが。小林秀雄のニーチェとの親和性は確かなことだろう。

- [松岡正剛の千夜千冊『意志と表象としての世界』アルトゥール・ショーペンハウアー](#)
- [松岡正剛の千夜千冊『ツァラトストラかく語りき』フリードリッヒ・ニーチェ](#)

小林秀雄は、「彼（ニーチェ）の一生で彼を本当に驚かした書物が三つある」（「ニーチェ雑感」、257ページ）と言う。ショーペンハウアーの主著「意志と表象としての世界」、スタンダールの「赤と黒」、ドストエフスキーの「地下室の手記」。読めば読むほど深みにはまる^^(;)

- [松岡正剛の千夜千冊『赤と黒』上・下 スタンダール](#)
- [松岡正剛の千夜千冊『カラマーゾフの兄弟』（全4冊）フョードル・ドストエフスキー](#)（「地下室の手記」ではなかったが・・・）

更新：2007-11-24T23:18:46+09:00

11/18/2007 (Sun.)

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXX - 「モーツァルト」読解 第3節

ようやく、第3節。「構想は、宛(あたか)も奔流の様に現れる」というモーツァルトの創作の秘密。

これを読んで思い出すのは、三島由紀夫だったか、芥川龍之介が「どの章からでも書き始めることができる」と言ったこと。太宰治がどの作品だったか、書き始めると淀みなく最後まで書き切ったという夫人の話。

天才の能力は凡人には理解しがたいものだ。昔、ピカソの陶器の展覧会を東京で見たことがあるが、皿に描かれている絵のパターンの多様さと豊富さに圧倒されたことがある。奔流のようにアイデアが溢れてくるのを描き続けたように思えたものだ。

[3-1] 「――構想は、宛も奔流の様に、・・・だから、後で書く段になれば、脳髄という袋の中から、今申し上げた様にして蒐集したものを取り出して来るだけです。・・・」というモーツァルトの手紙の引用。

[3-2] それは、「・・・言わば精神生理学的奇蹟として永久に残るより他はあるまい。・・・」が、「・・・しかし、これを語るモーツァルトの子供らしさという事になると、いろいろと思案を廻らす余地がありそうに思える。・・・」としている。

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXXI - 「モーツァルト」読解 第4節

第4節は、「言葉と物」に近い話題を提供する。フーコーはモーツァルトやベートーヴェンなど音楽については述べていないようだが、モーツァルトがそのものであった古典主義時代から、ロマン主義へと移り変わる時期をベートーヴェンが体現しているということにおいて、「モーツァルト」は「言葉と物」と親和性が高い内容を持っている。

・・・彼の死に続く、浪漫主義音楽の時代は音楽家の意識の最重要部は、音で出来上がっているという、少なくとも当人にとっては自明な事柄が、見る見る曖昧になって行く時代とも定義出来るように思う。音の世界に言葉が侵入して来た結果である。個性や主観の重視は、特殊な心理や感情の発見と意識を伴い、当然、これは又己れの生活体験の独特な解釈や形式を必要とするに至る。そしてこういう傾向は、言葉というものの豊富な精緻な使用なくては行われ難い。従って、音楽家の戦は、漠然とした音という材料を、言葉によって、如何に分析し計量し限定して、音楽の運動を保証しようかという方向を取らざる

を得なくなる。・・・

([4-1];16 ページ)

・・・ともあれ、現代音楽家の窮余の一策としてのモーツァルトというものは、僕には徒な難題に思われる。雄弁術を覚え込んで了った音楽家達の失語症 たらんとする試み。――ここに現れる純粹さとか自然さとかいうものは、若しかしたら人間にも自然にも関係のない一種の仮構物かも知れぬ。

([4-3];17-18 ページ)

[4-1] モーツァルトの死に続く、浪漫主義音楽について、浪漫派のシュウマンとワグネルについて述べる。

[4-2] 「永遠の小児モーツァルト」という伝説について。

[4-3] 現代の音楽家の浪漫主義音楽から古典主義音楽への回帰について。ストラヴィンスキーの復古主義への批判。

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXXII - 「モーツァルト」読解 第5節

第5節は「美とはなにか」について述べる。この節は要約するには短過ぎるかもしれない。要は、次の最後の言葉で要約される。

・・・真らしいものが美しいものにとって代わった、詮ずるところそういう事の結果であろうか。それにしても、心理というものは、確実なもの正確なものとはもともと何の関係もないものかも知れないのだ。美は真の母かも知れないのだ。然しそれはもう晦渋な深い思想となり了(おわ)った。

([5-4];19 ページ)

[5-1] 「美は人を沈黙させる」ことについて述べる。

[5-2] 「・・・優れた芸術作品が表現する一種言い難い或ものは、その作品固有の様式と離す事が出来ない・・・」という原理が忘れられている。

[5-3] 音楽は、その原理を明示するのに最適な芸術だが、「群がる思想や感情や心理の干渉を受けて」、すなわち言葉が侵入してきたがゆえに、沈黙を表現するのに失敗するようになった。

[5-4] 上記引用部分。[言葉と物 LXXIX - 「モーツァルト」読解 第2節](#)における「ニイチェ雑感」の引用を思い起こせ。

[11/19/2007 \(Mon.\)](#)

[\[クラシック\]](#) 言葉と物 LXXXIII - 「モーツァルト」読解 シュウマン

「モーツァルト」と「ニイチェ雑感」の「シュウマン」への言及の対応部分についてのメモ。

・・・和声組織の実験器としてのピアノの多様で自由な表現力の上に、シュウマンという分析家が打ち立てた音楽と言葉の合一という原理は、彼の狂死が暗に語っている様に、甚だ不安定な危険な原理であった。・・・

([4-1];16 ページ)

・・・ワグネルの音楽は、ベエトオヴェンの音楽と同様、音楽の一流派という様なものではない。ワグネルは、ベエトオヴェン以後に現れた最初の新しい音楽上の普遍的な意識である。彼の新しさは、言わばシューマンが一旋律の上に行ったスペクトル分析の如きものを、和声音楽の全組織に行ったところにあるのであり、ニイチェが同時代人として先ず惹かれたものは、この大分析家の意識の多様性であった。最も近代的な多声的資質であった。・・・

(「作家の顔」、新潮文庫 [草] 七B、259 ページ)

シューマンのピアノ協奏曲、イ短調、作品 54 をアルゲリッチのピアノとロストロポービッチ指揮ワシントン・ナショナル交響楽団で聴きながら(ドイツグラモフォン MG1169)。

- [ロベルト・シューマン - Wikipedia](#)

更新: 2007-11-25T19:28:13+09:00

[11/24/2007 \(Sat.\)](#)

[\[WWW\]](#) 言葉と物 LXXXIV - 「モーツァルト」読解 第6節

[モーツァルトの交響曲 15 番](#)ネタ。

[6-1] 第6節の最初には、ウイゼワのモーツァルトについての研究が引用されている。

・・・次の様な文句に出会った。

「この多産な時期に於ける器楽形式に関する幾多の問題の、どれを取り上げてみても、次の様な考えに落ち着かざるを得ない。即ち、円熟し発展した形で後の作品に表れる殆どすべての新機軸は、一七七二年の作品に、芽生えとして存する、と。彼にしてみれば、これは、不思議な深さと広さを持った精神の危機である。彼は、生まれて初めて、自分の作品の審美上の大問題に、はっきり意識してぶつかったと思われる」(Vol. I. page 418.)

([6-1]:20 ページ)

しかし、びっくりした。これほどまでの情報が Web 上にあるとは[^];[The Web KANZAKI -- Japan. music and computer](#)には Web 関連でお世話になることが多いのだが、音楽までお世話になるとは[^];;; 音楽関係があるとは知っていたが、・・・リンクされている楽譜のデータベース、[NEUE MOZART-AUSGABE ONLINE::NMA ONLINE::usr_web2_1](#)(DIGITAL MOZART EDITION)も凄いものだ。

1772年に作曲された7曲の交響曲のうち最初のものが第15番(K. 124)である。小林秀雄は、「・・・もっとも残念なのは、・・・分析され解説されているモーツァルトの初期作品が、僕らの環境ではまるで聞く機会がないことである。」と書いているが、1946年(昭和21年)当時は当然であろう。今では誰もが容易に聴くことができることに感謝しなくてはならないかもしれない。

- [交響曲に関するいくつかの情報](#)
 - [モーツァルトの交響曲](#)
 - [ハイドン、モーツァルトの交響曲時代比較](#)

[6-2] モーツァルトの天才であるがゆえの苦しみについて想像する。

・・・天賦の才というものが、モーツァルトにはどんなに重荷であったかを明示している。

才能がある御蔭で仕事が楽になるのは凡才に限るのである。十六歳で、既に、創作方法上の意識の限界に達したとはどういう事か。「作曲のどんな種類でも、どんな様式でも考えられるし、真似出来る」と彼は父親に書く。(一七七八年、二月七日)・・・若し彼に詩才があったなら、マラルメの様に「すべての書は読まれたり、肉は悲し」と嘆けただろう。少しも唐突な比較ではない。彼は、楽才の赴くがままに、一七七二年の一群のシンフォニーで同じ苦しみを語っている筈だ。

([6-2];21 ページ)

マラルメの引用は、「海の微風」という詩の冒頭で、西脇順三郎の訳では「肉体は悲しい、ああ、そして私はすべての書物を読んだ。」となっている。「BRISE MARINE」の原文は「La chair est triste, hélas! et j'ai lu tous les livres.」となっており、西脇の訳は原文の語順を生かした直訳に近い。(世界詩人全集 10 マラルメ ヴァレリー詩集、新潮社、1969年)小林の訳は文の順を入れ替えて、すべてを読んでしまったが故に、「肉は悲し」と読ませる。

[6-3] 「天才とは努力し得る才だ」というゲーテの言葉で始まる。「五里霧中の努力」により、「困難や障壁の発明による自己改変の長い道」を通り抜けるように、「いつも与えられる困難だけを、どうにか切り抜けてきた」結果、「一見意外とも思われるほど発育不全な自己を持っている」。

[6-4] いわゆるハイドン・セットの話に転ずる。

[6-5] この「六つのクワルテット」こそが、「・・・モーツァルト自身の仕事の上でも、殆ど当時の聴衆なぞ眼中にない様な、極めて内的なこれらの作品は、続いて起こった『フィガロの結婚』の出現より遥かに大事な事件に思われる。・・・」としている。

・・・僕はその最初のもの(K. 387)を聞くごとに、モーツァルトの円熟した肉体が現れ、血が流れ、彼の真の伝説、彼の黄金伝説は、ここにはじまるという想いに感動を覚えるのである。

([6-5];22 ページ)

今日届いたジュリアード弦楽四重奏団による「モーツァルト ザ・ハイドン・クワルテット」(SONY CLASSICAL SICG 825-827、1962年)を聴きながら。

更新: 2007-11-24T22:29:48+09:00

[11/25/2007 \(Sun.\)](#)

[\[批評\]](#) 言葉と物 LXXXV - 「モーツァルト」読解 *tristesse allante*

「モーツァルト」は第6節ではまだ導入部、第7節から本論に入るといった感じがする。世の中に小林秀雄の「モーツァルト」を愛読している人は多いだろうからと、少しググってみて、興味を持った部分について。第9節([9-5];37 ページ)にあるゲオンの言葉「*tristesse allante*」で検索する。

1. [TransNews Annex : tristesse allante とは](#)
2. [日々雑録 または 魔法の堅琴: 井上太郎「モーツァルトと日本人」](#)
3. [幻聴の伽藍 モーツァルト](#)

「*tristesse allante*」は英語に訳すと、「going sadness」となる(livedoor 仏語翻訳)。allant(e)の形容詞には、(1)動き回ることの好きな、活動的な。(2)(老人が)動き回ることができる、活力がある。(3)堪える. という意味がある(スタンダード佛和辞典、大修館、1968年16版)。allant(e)の動詞は語幹から「aller」と考えられ、辞書の最初の意味は「行く」だから、英語の「go」に対応している。

ゲオンがこれを *tristesse allante* と呼んでいるのを、読んだ時、僕は自分の感じを一言で言われた様に思い驚いた。(Henri Ghéon, *Promenades avec Mozart*) 確かに、モーツァルトのかなしさは疾走する。・・・こんなアレグロを書いた音楽家は、モーツァルトの後にも先にもない。・・・

この文の前に、ト短調クインテット、K. 516 の冒頭のアレグロ (*Allegro*) が引用される。ゲオンはテンポを表す *Allegro* と対照させて、「*tristesse allante*」、言い換えれば「*allègre tristesse*」と表現している(上記記事2の次の部分)。

・・・第一楽章は(アレグロ)は、1787年の無二の傑作《弦楽五重奏曲ト短調》K516の冒頭部のアレグロの最高の力感のうちに見出される耳新しい音をときとして響かせている。それはある種の表現しがたい苦惱で、《テンポ》の速さと対照をなしている足どりの軽い悲しさ (*tristesse allante*) 言いかえれば、爽やかな悲しさ (*allegre tristesse*) とも言える。・・・

Allegro はイタリア語で、急速に、快速にという演奏の速度記号であり、テンポを速くという意味を現している。「*allègre*」はフランス語の *Allegro* であろう。テンポに従って「かなしさは疾走する」のである。

この前の段落([9-4];36 ページ)の最初に次の様にある。

スタンダールは、モーツァルトの音楽の根柢(こんてい)は *tristesse* (かなしさ) というものだ、と言った。・・・

小林秀雄は「*tristesse allante*」に「モーツァルトのかなしさは疾走する」ことを読み取ったのである。元のゲオンの意も、アレグロで進行する「かなしさ」と考えてよいだろう。モーツァルトの音楽の根柢にかなしさがあるという見方は、このト短調 K. 516 を聴けばなるほどと思わせる。これまで、モーツァルトは軽快で明るく、クールでそれほど思い入れがなく、感情の入らない(古典主義的な)気持ちの良い音楽という感じを持っていたので、この見解には考えさせられることが多かった。

アルバンベルク・クアルテット+マルクス・ウォルフの弦楽五重奏曲 第4番 ト短調 K. 516 (EMI CLASSICS TOCE-59219、1986年)を聴きながら。

更新: 2007-11-30T23:06:22+09:00

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXXVI - 「モーツァルト」読解 第7節

咳が少し残っているが、風邪からはほぼ回復した。現代的洗濯機の実体験を今日は試みることになったのだが、昔の洗濯機とまったく水の使い方が違うのに 驚いた。洗濯物が水にジャブ付けになって槽の中をグルグル回るような洗い方ではない。言わば手で揉み洗いをするのに近いのだろうかあとthinkしながら、最初は これでいいのかなあと心配そうに見ていたのだが、しばらく目を離している間に脱水まで終わっていた。当然とはいえ、知らない間に世の中は進化している。さて、先を急ごう。

[7-1] プロドナムがモーツァルトに面識のあった人の話を集めた話からの引用。義妹のゾフィ・ハイベルの話。

[7-2] 義兄のヨゼフ・ランゲの話。ランゲが描いたモーツァルトの肖像画については[2-2]で一度出ている。

[7-3] 小林秀雄は言う。「・・・僕は、何も天才狂人説などを説こうとするのではない。人間は、皆それぞれのラプトゥス(日記註: 一種の狂気状態)を持っていると簡単明瞭に考えているだけである。」

[7-4] 「・・・モーツァルトの伝記作者達は、皆手こずっている。確実と思われる彼の生活記録をどう配列してみても、彼の生涯に関する統一ある観念は得られないからである。・・・」

[7-5] 「・・・そんな事を言ってみても、彼の統一のない殆ど愚劣とも評したい生涯と彼の完璧な芸

術との驚くべき不調和をどう仕様もない。・・・」バッハやベエトオヴェンとの対比。

[7-6] 「自分の作品を眺めている作者とは、或る時は家鴨を孵した白鳥、或る時は白鳥を孵した家鴨。」というヴァレリィの言葉の引用。「・・・人と作品との因果的連続を説く評論家達の仕事は、到底作品生成の秘儀には触れ得まい。・・・」

[7-7] 「・・・創造する者も創造しない者も、僕等は皆いずれは造化の戯れのなかに居る。・・・」
「ラプラスの魔を信ずるのもよい。」

[7-8] ヴァレリィから批評の話に転調する。テエヌとバルザック。

[7-9] ランゲの苦衷を想像する。「一番大切なものは一番慎重に隠されている、自然に於いても人間に於いても。」

[7-10] ランゲの肖像画の魅力。



ランゲの未完成の肖像画

Source: [http://www.mozartforum.com/images/Mozart_\(unfinished\)_by_Lange_1782.jpg](http://www.mozartforum.com/images/Mozart_(unfinished)_by_Lange_1782.jpg)

Status: [Public domain](#)

小林秀雄氏はザルツブルグまで原画を見に行かれたのだろうか。写真版から色彩を勝手に想像しているのに、変な色を塗られてはかなわぬと・・・

[7-11] ロダンのモーツァルトの肖像について。(グスタフ・マーラー(4) [画像+文章]のページにある「モーツァルト」の頭部像がそうだと思う。)

・・・ロダンの考えによれば、モーツァルトの精髓は、表現しようとする意志そのもの、苦痛そのものとも呼ぶより仕方がない様な、一つの純粋な観念に行きついている様に思われる。

更新: 2007-11-26T21:24:24+09:00

11/27/2007 (Tue.)

[物理学] 言葉と物 LXXXVII - E8

なんだか、ほとんど寒くない。散歩日和の毎日である。なんて暢気なことを言っているとどこかか

らお叱りの言葉が飛んできそうな気もするが。少し古い「サーファー物理学者」の新たな統一理論に注目集まるネタ。

音楽に何を読み取るか、伝記から何を読み取るか、歴史から何を読み取るか、書物から何を読み取るか、人の表情から何を読み取るか。人間の生活は、パターンを読み取ることから成り立っているとも言えないことはない。「モーツァルト」から作品生成の秘儀を読み取れるかどうかは次の機会に求めるとして、今日は、時空にどのような構造を読み取るかという話。

物理学は、超弦理論かM理論などの万物理論を追い求めてきているが、究極理論は実は場や時空に関係したものではなく、物理過程の間で交換される情報に関する理論になるだろうと考えられるようになってきている(J. D. ベッケンスタイン、「ホログラフィック宇宙」、日経サイエンス 2003年11月号、56ページ)。

- 更新日記記事の「ホログラフィック宇宙」検索結果
 - [\[日記\]ホログラフィック宇宙](#) (2003/10/09)
 - [\[日記\]パラレルワールド読了](#) (2006/02/15)
 - [\[日記\]時](#) (2007/02/27)
 - [\[哲学\]言葉と物 XIII - 哲学者と科学者たち](#) (2007/05/05)
 - [\[物理学\]ポケット宇宙が織り成すメガバース](#) (2007/06/02)

ネタ記事は、数学的パターンが万物の構造として読み取れるという話である。「E8はおそらくすべての数学の中で最も美しい構造であるが、非常に複雑だ。」という、[Hermann Nicolai](#)の言葉がLisiの論文「例外的に単純な万物理論」に引用されている。

- [Antony Garrett Lisi - Wikipedia, the free encyclopedia](#)

更新: 2007-11-30T22:54:51+09:00

11/30/2007 (Fri.)

[\[文学\]](#) 言葉と物 LXXXVIII - 「モーツァルト」読解 第8節

朝は陰翳の明瞭な絵画的な雲が青空を背景に広がるのを観察しながら出掛け、昼は青緑色の宮島を遠くに観望し、夜は暗くなったアスファルト舗道に乾燥した枯れ葉が冷たい風に舞ってカサカサと音を立てるのに耳を澄ます。冬が近づいている。「モーツァルト」読解も佳境に入ったが、ゆるゆるとしか進まぬ。焦る理由はどこにもない。あちこち彷徨いつつ、いつか終点に辿りつけばよい。



宮島遠望

第8節はスタンダールについて書いてあるといってもよい。「モーツァルト」は様々なモーツァルト論についての集成でもある。スタンダールが書いたモーツァルト論からはじまり、「モーツァルト」を通して「スタンダール」を語る。

- [スタンダール - Wikipedia](#)
- [赤と黒 - Wikipedia](#)
- [松岡正剛の千夜千冊『赤と黒』上・下 スタンダール](#)

[8-1] スタンダールがモーツァルトについて書き遺したのは「ハイドン・モーツァルト・メタスタシオ伝」だけであると書かれているのだが、アマゾンで検索すると、スタンダール 著、高橋英郎訳、富永明夫訳、[モーツァルト \(ミュージック・ライブラリー\)](#)、東京創元社；新装版版 (2006/3/23)が出てくる。ロマン・ロランの序文抜粋を含むと書いてある。264 ページもあり、数ページの短文ではない。少し調べてみる必要があるかもしれない。東京創元社の[モーツァルト](#)のページを見ると、「モーツァルト伝」以外にもモーツァルトに関する断章を集めていると書いてある。

それはともかく、モーツァルトという「・・・偶然が、これほどまでに、天才を言わば裸形(らぎょう)にしてみせた形はなかった。今日ではイタリア人が怪物的天才と呼んでいる驚くべき結合に於いて、肉体の占める分量は、能(あた)う限り少なかった」という引用がなされている。

[8-2] [8-1]の引用から、スタンダールにモーツァルトと同質のものを読み取る小林秀雄がいる。

・・・この文句は、長い間、僕の心にうちにあって、あたかも、無用なものを何一つ纏わぬ、純潔なモーツァルトの主題のように鳴り、様々な共鳴を呼覚ました。・・・

([8-2];29-30 ページ)

[8-3] 小林のスタンダール論である。「生涯に百二十乃至百三十の偽名を必要としたエゴティスト」

・・・そこで、凡そ行為は、無償であればある程美しく、無用であればある程真実であるというパラドックスの上に、彼は平然と身を横たえ、月並みな懐疑派たる事を止める。

([8-3];31 ページ)

[8-4] モーツァルトとの類似性を説くスタンダール論の続き。「無償性無用法の原理」「エゴティスムという大芝居」

[8-5] 続き。

・・・作家に扮した俳優は、自力で演技の型を発明しなければならなかったばかりでなく、観客を発明しなければならなかった。・・・

([8-5];32 ページ)

[8-6] 「モーツァルト伝」に戻る。

・・・音楽の霊は、己れ以外のものは、何物も表現しないというその本来の性質から、この徹底したエゴティストの奥深い処に食い入っていたと思えてならないのである。彼が、人生の門出に際して、モーツァルトに対して抱いた全幅の信頼を現した短文は、洞察と陶醉との不思議な合一を示して、いかにも美しく、この自己告白の達人が書いた一番無意識な告白の傑作とさえ思われる。・・・

([8-6];32-33 ページ)

[8-7] スタンダールに音楽的訓練があったならという空想。

12/1/2007 (Sat.)

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXXIX - 「モーツァルト」読解 第9節

さて、第9節に入る。既に *tristesse allante* については取り上げた。

[9-1] 三百数十通の書簡集に現れるモーツァルト。その内容は美しい音楽と異様な対照を示すという、周囲の人のモーツァルトの言動の記録(第7節)と同様の内容のようにまずは説明されるが、「手紙から音楽に行き着く道はないとしても音楽の方から手紙に下りて来る小径(こみち)は見つかるだろう」とされる。

[9-2] 実例。

[9-3] 「音楽家の魂が紙背から現れてくるのを感じてくだろう。」書簡集からはモーツァルトの音楽に似たものが見える。

[9-4, 5] [言葉と物 LXXXV](#) - 「モーツァルト」読解 *tristesse allante*、モーツァルトの音楽の深さ。

[9-6] 「モーツァルトの音楽の深さと彼の手紙の浅薄さとの異様な対照を説明しようとして、・・・」評家の少なくない見方。

・・・つまるところ彼は、自分の芸術に関する強い自負と結び付いた人生への軽蔑の念を、人知れず秘めていたのではあるまいか、・・・

(37 ページ)

[9-7] その見方への批判。

しかし、僕はそういう見方を好まぬ。・・・彼らにモーツァルトのアレグロが聞こえて来るとは思えない。彼らの孤独は、極めて巧妙に仮構された観念に過ぎず、時と場合に応じて、自己の防衛の手段、或いは自己嫌悪の口実の為に使用されている。・・・

([9-7]:37-38 ページ)

[9-8]

・・・若し、心の底などというものが、そもそもモーツァルトになかったとしたら、どうということになるか。・・・要はこの自己告白の不能者から、どんな知己も大した事を引き出し得まいという事だ。

([9-8]:38 ページ)

[9-9] 「モーツァルトの孤独は、彼の深い無邪気さが、その上に坐るある充実した確かな物であった。」、メエリケの『プラアグに旅するモーツァルト』について。

[9-10] [9-6, 7]の批判の根拠として、「自分を一ぺんも疑ったり侮蔑したりした事のない人に、どうして人生を疑ったり侮蔑したりする事が出来ただろうか。」モーツァルトの音楽に関する自負について。

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXXX - 「モーツァルト」読解 第10節

12月に入った。毎年のことだが、1年の経つのは早い。言葉と物シリーズも昨年11月に始めたが、既に1年を過ぎ、90回を迎えた。その中、思い付きではじめた「モーツァルト」読解も全11節のうち、第10節に到達した。しかし、ページの分量としては、残りの第10節と第11節で全体53ページのうちのほぼ4割の20ページを占める。道半ばなのである。また、内容は音楽の内部に深く分け入ったもので、実験的、冒険的なものだろう。読解も難しい感じがする。

[10-1] モーツァルトのピアノ曲の単純で純粋であるが故の難しさ。アマチュアのピアノコンクールで最も人気のないのがモーツァルトの曲である。

[10-2] モーツァルトとハイドンの個性の相違。

[10-3] ワグネルのモーツァルトとハイドンのシンフォニーの違いについての意見。モーツァルトの歌うメロディの短さ。ベートーヴェンとの対比。

[10-4] 「モーツァルトは、主題として、一と息の吐息、一と息の笑いしか必要としなかった。・・・」

[10-5] ハイドンとの違い。「心が耳と化して聞き入らねば、ついて行けぬようなニュアンスの細やかさがある。」

[10-6] 朝焼けの空に動いている雲のきれぎれが、三十九番シンフォニー (K. 543) の第4楽章のおそらく冒頭?の十六分音符の集りのように見えた。(最後の音は、八分音符だと思うのだが?)

不安定な主題の限らない変転。モーツァルトの守り通した作曲上の信条。divertimentoの主題の捉えきれぬ運動。「あの tristesse が現れる。---

ここらの部分から「モーツァルト」の最も重要な部分に入っていくのだが、これを本当の意味で理解するには、モーツァルティアンなるものにならねばならないのかもしれない。実際に演奏できなければ、少なくとも相当に聴きこんで、楽譜の詳細と演奏を対比させて理解せねばならない。また、音楽に関する幅の広い知識や教養を必要とするのだろう。今では、[NEUE MOZART-AUSGABE ONLINE](#)にアクセスすればモーツァルトのシンフォニーの楽譜を見ることが出来るし、意欲さえあれば容易に勉強できる環境は整っている。しかし、ここでは、あまりにも多くのことが語られており、その一つ一つを詳細に解説していくことは大変な作業になる。短期間には難しい。他の前の節との対応と全体の構成要素としての位置づけに限定し、重要な細部は必要に応じて記すことにして、包括的に見ることにしたい。だいぶ端折らねばならないだろう。

[10-7] tristesse allante が「かなしさが疾走する」という前述の表現([9-4, 5])の変奏として、互いに矛盾する二つの観念の並置として理解される。「かなしさ」と「疾走する」は矛盾するとは言えない。すなわち、「かなしさ」とアレグロの「快活な」という意味について言っているのであろう。「動き回ることができる」場合には、悲しさを紛らわそうとする場合と元気に動き回ると二つの意味があると考えられる。allanteには「堪える」という意味もある。

ベートーヴェンの対立する観念の二つの主題を対比させ、力感を表現したこととの比較。モーツァルトの力学は自然であり、隠されている。「一つの主題自身が、まさに破れんとする平衡の上に慄(ふる)えている。」「四十一番シンフォニーのフィナーレ」が、最初の主題とともに例示される。内容的には[10-6]の繰り返し。

[10-8] これは「モーツァルト」の結論とも言うべき段落であろう。引用するとなるとすべてになるので、読者に本文に当たっていただく。ハ調クワルテット (K. 465) の第二楽章が登場するが、アンダnte・カンタービレ(Andante cantabile)の演奏記号が付いている。チャイコフスキイのカンタービレとの対比。

続く

更新: 2007-12-02T14:05:01+09:00

12/3/2007 (Mon.)

今朝は10°C、帰宅時は8°Cを示した。通常は帰宅時のほうが高い。逆の傾向ということは気温が大きく下がりつつあることを意味している。冬に入った。

続き

[10-9] [10-3]でワグナーがモーツァルトのシンフォニーがハイドンと異なる決定的なところは、「器楽主題の以上に感情の豊かな歌うような性質にある」とした定説をまず繰り返す。しかし、物理学者達が万物の成り立ちに様々な構造を読み取るように、音楽の鑑賞者や解説者、批評家たちも「モーツァルト」の音楽に様々な自らの聞きたい模様やあるいは予想外の深奥の構造を感知し、聞き取るのである。

「モーツァルト」の正しい聴き方があるかどうかは知らぬが、小林の好みは「モーツァルトが熟練と自然さとの異様な親和のうちに表現し得た彼の精神の自由を痛切に感得する」ような聴きかたである。

何か、書き方のレベルが少し変化してしまっただが、まあいいだろう。問題点、課題を探索する過程なのだ。さて、最後まで辿り着けるだろうか。はて、何を取り出せるのか。何を考え出そうとしているのか。

つづく

更新: 2007-12-03T23:02:53+09:00

12/8/2007 (Sat.)

今週の水・木は東京にいたのだが、それほど寒くなかった。少し外を歩くくらいならコートも不要なぐらいだ。冬が来たと思うと少し暖くなる。帰りの飛行機が高度を下げると地上の明りの連なりが美しく映え、滑走路へと導く誘導灯が赤く燃える十字架のように見える。最終便の飛行機はあっという間に着陸すると、素早く逆噴射して無駄なく機首を停泊地へと向ける。もうすぐ今年も終わるとリズムジンから暗い道路を眺めながら思った。

[10-10] モーツァルトの音楽の形式的な端正さ、整然とした様は一面では感じられるが、その均整は際どい均衡の上に成り立っている。一つの均衡が新しい均衡に移り変わる。表現は違うがそのようなことを述べている。その特徴的な例はト短調クインテットだろうと思う。

[10-11] ワグナーのモーツァルトのシンフォニーの解説について。モーツァルトの歌劇は器乐的だということについて。「フィガロ」のスザンヌとヴァイオリンの対話。

[10-12] ワグナーがモーツァルトのシンフォニーが劇的動機を欠いていることを論じていることについて。モーツァルトのシンフォニーに肉声という楽器が加わったのが、モーツァルトの歌劇である。「ドン・ジョバンニ」という劇的思想を表現した音楽が現われたわけではない。

[10-13] [10-12]の変奏。

[10-14] 「モーツァルトに捕らえられた歌は、単なる美しい形の旋律ではない。人間の声である。それはやはり、あの明け方の空の切れ切れな雲だ。ヴァイオリンが結局 ヴァイオリンしか語らぬ様に、歌はとどのつまり人間しか語らぬ、モーツァルトは、殆どそう言いたかったかも知れぬ。」

[10-15] 「大事なのは、モーツァルトの音楽の最も深い魔術は、そういう聯想という様な空漠たるものを相手に戯れた処にはなかった、彼の音楽は、自然の堅い岩に、人間の柔らかい肉に、しっかりと間違いなく密着していたということだ。」

[10-16] 「実を言えば、僕は、モーツァルトを、音楽家中の最大のリアリストと呼びたいのである。」

[10-17] [10-16]の変奏。「モーツァルトとワグネルとのクロマチスムの使用法は、形式の上では酷似している。耳を澄まして聞くより他はない。」

更新: 2007-12-09T00:00:44+09:00

12/9/2007 (Sun.)

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXXIV - 「モーツァルト」読解 第11節

さて、最後の節によく到達した。読解が終わるということではない。まず、何が書いてあるのかを確認する作業が終わりに近づいたということに過ぎない。それ以上の読解をどのように深め得るのかはまだ何とも言えないけど。

[11-1] モーツァルトの作品量の膨大さ。モーツァルトの多様性はシェイクスピアの多様性に似ている。「ドン・ジョバンニ」、「フィガロ」、「最後の三つのシンフォニー」。「・・・誰も、叙事詩の魂の様に平静に歩いて行くモーツァルトの音楽の運命の様な力を逃れられぬ。」

[11-2] あらゆる音楽を吸収し、普遍性に到達したモーツァルトの音楽の多様性の発現。

[11-3] 「・・・モーツァルトの作品の、殆どすべてのものは、世間の愚劣な偶然な或は不正な要求に応じ、あわただしい心労のうちになったものだという事である。」

[11-4] 「命の力には、外的偶然をやがて内的必然と観ずる能力が備わっているものだ。」

[11-5] 「モーツァルトにとって製作とは、その場その場の取引であった。彼がそう望んだからである。・・・恐らく、それは、深く、彼のこの世に処する覚悟に通じていた。」

[11-6] スタンダールとの対比。「・・・モーツァルトは、どの様な種類の音楽も生きてると信じた時、音楽の根柢的な厳しい形式が自ら定まるのを覚えた。」

[11-7] 「現代の芸術家、のみならず多くの思想家さえ毒している目的とか企図とかいうものを、彼は知らなかった。」

[11-8] 「モーツァルトは、歩き方の達人であった。」

[11-9] 「モーツァルトは、目的地なぞ定めない。歩き方が目的地を作り出した。」

[11-10] 「其処に遍満する争う余地のない美しさが、僕等を、否応なく説得しないならば、僕等は、恐らくこの世界について、統一ある観念に至るどの様な端緒も掴み得まい、そういう世界である。」

[11-11] 「モーツァルトという或る憐れな男が、紛う事ない天上の歌に酔い、気を失って仆れるのである。しかも、なんとこの確かさだ、この気を失った男の音楽は。」

[11-12] 「二年来、死は人間達の最上の真実な友だという考えにすっかり慣れております。・・・」

[11-13] 「何故、死は最上の友なのか。死が一切の終わりである生を抜け出て、彼は、死が生を照らし出すもう一つの世界からものを言う。ここで語っているのは、もはやモーツァルトという人間ではなく、寧ろ音楽という霊ではあるまいか。・・・しかし、彼が神である理由が何処にあらう。やがて、音楽の霊は、彼を食い殺すであらう。明らかな事である。」

[11-14] 鎮魂曲の作曲の依頼。「モーツァルトは、この男が冥土の使者である事を堅く信じて、早速作曲にとりかかった。」

[11-15] モーツァルトの死。

更新: 2008-01-13T23:00:52+09:00

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXXV - 「モーツァルト」読解 I

「モーツァルト」読解を「言葉と物」読解の一環として取り上げたのは、モーツァルトの生きた時代が、18世紀後半、フーコーの言う古典主義時代の最後であり、近代へとつながるカントの生きた時代と重なるからである([本]言葉と物 LXIII - モーツァルト)。フーコーの言う古典主義時代と音楽の分野における古典主義が重なるのも偶然ではないのだろうと思う。そこに他の領野で生じたのと同じような変化が音楽でも起こったのだろう。他にも、思いつくままに、さらに枝葉を伸ばしてみよう。

[9-4] ト短調クインテット(K. 516)をどのように聞か。僕は、孤独な道化の彷徨とその魂の救済の物語として聞くこともできると感じた。そこには明らかな感情の表出はなく、飄々としているが、同時に何かあやうさを感じさせながらも均衡を保っていく機械的ともいってよい優雅さがある。ぴったりくるのは道化という言葉のような気がする。「快活な悲しみ」という印象にも通じるものであろう。

形態素解析はできても、このような読み方あるいは聞き方はコンピュータにはとてもできないものだし、当然、人によっても読み方・聞き方は異なるのである。読み方にもよるし、どれだけの知識を持っているかによって、何を読み取れるか、また、何に関心や興味や問題意識を持っているかによって、何を読み取ろうとするかが変わるはずである。

音楽については、楽譜があり、その演奏があり、現代では、演奏の記録媒体としてLPやCDが存在している。それらの等価物のような様々なものがWeb上に存在している。また、モーツァルトに関する批評や伝記、書簡集などが存在する。「モーツァルト」を理解するための基本的な物あるいは事はある程度入手可能な状態にある。ここで、これまで、原典に当たったもの(○)と当たらなかったもの(×)をリストアップしておこう。最初に書いた曲目のリストを大幅に拡張した。

1. ○エッケルマンの「ゲーテとの対話」(1829年): [1-1]
2. ×ゲーテの「ファウスト」: [1-2]; [1-6]
3. ○ベエトオヴェンの「クロイチェル・ソナタ」のブレスト: [1-3]
4. ○ベエトオヴェンのハ短調シンフォニー(の第一楽章): [1-3]; [1-5]
5. ×トルストイの「クロイチェル・ソナタ」: [1-3]
6. ×ロマン・ロオランの「ゲーテとベートーヴェン」: [1-4]
7. ×[フィガロの結婚](#): [1-5]; [6-5]; [10-12]; [11-1]
8. ×Sturm und Drang: [1-6]
9. ×ニイチェの「ニイチェ対ワグネル」: [1-6]
10. ○[ドン・ジョヴァンニ](#): [1-9]; [6-2]; [10-13]; [11-1]; [11-12]
11. ○ト短調シンフォニー(楽譜) ← 第40番、K. 550: [2-1]; [2-2]
12. ×ヤアンによって保証されたモーツァルトの手紙: [3-1]
13. ×モーツァルトの父宛の手紙(マインハイム、1777年11月8日): [4-1]
14. ×ストラヴィンスキイのカノン: [4-3]
15. ×バッハのカノン: [4-3]
16. ×ウイゼワの研究: [6-1]
17. ×一七七二年の作品、一群のシンフォニー: [6-1]; [6-2]
18. ×1772年(16才)のモーツァルトの姉への手紙、レオポルドから妻への手紙(1772年10月28日): [6-2]
19. ×モーツァルトから父への手紙(1778年2月7日): [6-2]
20. ×「天才とは努力し得る才だ」というゲーテの言葉: [6-3]
21. ○六つのクワルテット(その最初のもの、K. 387) ← 「ハイドン四重奏曲」: [6-4]; [6-5]
22. ×プロドムムの記録: [7-1]
23. ×ヴァレリイの言葉: [7-6]; [7-7]
24. ×テエヌの批評の方法、*faculté maîtresse*、バルザック: [7-8]
25. ○ランゲの未完成のモーツァルトの肖像画: [7-9]
26. ○ロダンのモーツァルトの肖像(彫像): [7-10]
27. ×スタンダールのモーツァルト伝(「ハイドン・モーツァルト・メタスタシオ伝」): [8-1]
28. ×パルムの僧院: [8-6]
29. ×モーツァルトの書簡集: [9-1]

30. ×1777年(21才)の父宛、友人のブルリンガ宛の母の死の手紙: [9-2]
31. ○ト短調クインテット、K. 516(楽譜): [9-4]
32. ×メエリケの「プラアグへ旅するモオツァルト」: [9-9]
33. ○ピアノ曲(特にどの楽曲とは指定されない): [10-1]
34. ×ワグネルのモオツァルトのシンフォニーの解説: [10-3]
35. ×ハイドンの音楽: [10-5]
36. ○三十九番シンフォニー(楽譜): [10-6]
37. ×divertimento(特にどの楽曲とは指定されない): [10-6]
38. ○四十一番シンフォニー(楽譜): [10-7]
39. ○ハ調クワルテット(K. 465) ← ハ長調「不協和音」、「ハイドン四重奏曲 第6」: [10-9]
40. ×チャイコフスキーのカンタービレ: [10-9]
41. ×[ヨジ・ファン・トゥッテ](#): [10-16]
42. ×ヴァレリーの嘆き「われわれは、お互いに誤解し合う程度に理解し合えば沢山だ」:
[10-17]
43. ×スタンダールの「耳に於けるシェクスピアの恐怖」→シェイクスピアの多様性: [11-1]
44. ×ニッセンの伝えるところ: [11-1]
45. ○最後の三つのシンフォニー ← 第39番、第40番、第41番: [11-1]
46. ○ハイドンの几帳面過ぎとバッハのドグマティック: [11-2]
47. ×ニイチェの [Amor fati](#): [11-5]
48. ×ベートーヴェンの「フィデリオ」: [11-10]
49. ×[アヴェ・ヴェルム](#): [11-10]
50. ×魔笛: [11-10]
51. ×「ドン・ジョヴァンニ」を構想する前に父親に送った手紙: [11-12]
52. ×[鎮魂曲\(レクイエム\)](#): [11-14];[11-15]

更新: 2007-12-09T16:21:52+09:00

[\[情報処理\]](#) 言葉と物 LXXXXVI - 「モオツァルト」読解 II

少し、プログラムのサイトらしく考えよう。固有名詞を見ると大体どんな話を書いてあるかわかってくる。前の記事のリスト形式の表現では何が書いてあるのかわかりにくい。表を作ってみよう。

形態素解析して、自動的に表を生成するとかすれば、それなりにおもしろいけど、固有名詞を見分けて分類するのが難しい。たとえば、「クロイチェル・ソナタ」は曲名と書名があるが、これを見分けて分類するためには、文脈から類推したり、知識を持っていることが必要である。固有名詞は直接、知識と結びついている。

形態素解析のためには「モオツァルト」のテキスト電子データが必要だ。それは最初からあきらめていたのだが、ここまで読み込むなら、最初に作るほうが理解も早かったかも。

「モーツァルト」読解

【節-段落】	ページ	人名	書名	曲名	その他の固有名詞	時間座標	空間座標
[1-1]	7	エッケルマン;ゲエテ	ゲエテとの対話			1829年	
[1-2]	7		ファウスト			80才(ゲエテ)	
[1-3]	7-8	トルストイ;ベエトオヴェン;ゲエテ	クロイチェル・ソナタ	クロイチェル・ソナタ;ハ短調シンフォニー			
[1-4]	8	ベエトオヴェン;ゲエテ;ロマン・ロオラン	Goethe et Beethoven			7才(モーツァルト)	
[1-5]	8-9	メンデルスゾオン;ゲエテ;ベエトオヴェン		ハ短調シンフォニー	雷神ユピテル		
[1-6]	9-10	ゲエテ;ベエトオヴェン;ワグネル;ニイチェ	ニイチェ対ワグネル;ファウスト		Sturm und Drang		ベルリン
[1-7]	10	ワグネル;ニイチェ;ゲエテ;ベエトオヴェン			ワグネリアン;ファウスト博士;浪漫派;浪漫主義;古典主義		
[1-8]	10	ワグネル;ニイチェ;ベエトオヴェン;ゲエテ					
[1-9]	10-11	エッケルマン;シュウベルト;ヴルフ;シュウマン;ゲエテ	ファウスト	ドン・ジョバンニ	無限旋律;ヘレナ		

ここで、一旦、[言葉と物 XII - 分類学からの出発 \(2007/05/03\)](#)へ戻ってみよう。これまで書いたことをすっかり忘れてる^^;)要は、古典主義時代とは何かを明確にする必要がある。

更新: 2007-12-09T21:43:59+09:00

12/10/2007 (Mon.)

[【自然言語処理】](#) 言葉と物 LXXXXVII - Q-go

[【インタビュー】](#) Webはもっと人間に近くなる - 自然言語検索ベンチャーのQ-goの挑戦ネタ。

うーむと唸ってしまった。これだよ、これ。よしよし。言語によって、解析の仕方は異なってくるべきと思っていた。やはり、自前の辞書みたいなものを作るのが重要なのではとったりしている。形態素解析の限界は固有名詞や言語の独自の(創造的)使用にある。これは辞書の限界とも言える。

• [Q-go | Natural Language Search](#)

名詞には普通名詞と固有名詞の二種類がある。「モオツァルト」の連載では、固有名詞の表を作ってみた。固有名詞は普通名詞で分類できる。普通名詞は 事物の属性を表す。固有名詞は属性の値にもなるだろう。属性の値としては数値もあり得る。事物とは属性の集合からなる。そんなことをぼんやり考えている。

ここで、一つの本が書かれたものについて考えよう。ここでは批評であるが、文の集合である。文は何からなるか。ここで文法が登場する。形態素解析も基本的には文法に基づくものだろう。文の意味を担うものは、文法要素のすべてであろうが、主要な構成要素は名詞である。形容詞は名詞を修飾して、名詞の持つ 属性を表す。副詞は動詞や形容詞を修飾する。動詞や助動詞、接続詞は文の論理を司るのかもしれないが、論理も名詞の属性として表されるのかもしれない。文 の構造をどう捉えるのか。少し日本語文法を勉強してみる必要がある。

無論、そのような展開になることは随分以前から予想していて、最近では小池清治著「現代日本語文法入門」(ちくま学芸文庫、1997年)、山崎紀美子 著「日本語基礎講座 - 三上文法入門」(ちくま新書、2003年)、池上嘉彦著「日本語と日本語論」(ちくま学芸文庫、2007年、原著:「日本語論」への招待、講談社、2000年)などを捲っている。

更新: 2007-12-15T14:51:27+09:00

12/15/2007 (Sat.)

[\[瀧一博\]](#) 言葉と物 LXXXXVIII - 混沌の世界

[人工知能に関する断想録: \[その他\] 瀧一博記念コロキウム](#)ネタ。

[瀧一博記念コロキウム『論理と推論技術: 四半世紀の展開』](#)(2007年10月20日(土) 9:00~18:00 慶應義塾大学三田キャンパス東館6階 G-SEC Lab)にある佐藤泰介先生のスライド「記号的統計モデリングの世界を探る」の最後から2枚目「混沌の世界」の最後には次のようにある。

不確定性は確率だけでなく無知や複雑さによっても引き起こされる。確率の先に不確定性があり、論理と不確定性の統合はまだ先が見えない。

[PRISM](#)については以前少し言及したことがあった([\[日記\]新プロジェクトに向けて: 2004/11/22](#))が、何をどのように使うのか、また何をどのようにしたいのかが曖昧なので、歯が立っていない。論文だけは山ほど印刷して持っているが・・・何をどのようにしたいのかについて考えていこう。

「モオツァルト」第1節の最後のほうを引用する。

・・・彼の深奥にある或る苦い思想が、モオツァルトという或る本質的な謎に共鳴する。ゲエテは、エッケルマンに話してみようとしたが、うまくいかなかった。無論、これは僕の空想だ。僕はそんな思想とも音楽ともつかぬものを追って、幾日も机の前に坐っている。沢山な事が書けそうな気がするが、又何も書けないような気がする。

([1-9]; 11 ページ)

「彼の深奥にある或る苦い思想」の彼というのは「ゲエテ」だが、「深奥にある或る苦い思想」とは何を指しているのか。

おそらく、冒頭の[1-1]と[1-2]に書いてあることに対応しているのだろうと考えられる。特に次の[1-2]に対応する。

ここで、美しいモーツァルトの音楽を聞く毎に、悪魔の罠を感じて、心乱れた異様な老人を想像してみるの悪くあるまい。この意見は全く音楽美学という様なものではないのだから、それに、ファウストの第二部を苦吟していたこの八十歳の大自意識家が、どんな悩みを、人知れず抱いていたか知れたものではあるまい。

([1-2]; 7 ページ)

読解するとはどういうことなのだろう。もっと他にも共鳴する箇所がある。

・・・ベエトオヴェンを嫌い又愛したゲエテもまたモーツァルトを想ったが、彼は、ニイチェより美について遥かに複雑な苦しみを嘗めていた。彼が、モーツァルトについて、どんな奇妙な考えを持っていたかは、冒頭に述べた通りである。

([1-8]; 10 ページ)

この三箇所には「苦い」([1-9])、「苦吟」([1-2])、「苦しみ」([1-8])と、「苦」という文字が三様に現われて、それぞれを連想させる。「ファウスト」第二部の苦吟は、モーツァルトから離れて、他の段落([1-6]、[1-7])にも展開されている。

以上のように、第1節はゲエテとモーツァルトの関係あるいはファウストを主軸に展開するが、ゲエテとベエトオヴェンの関係についても、[1-3]から[1-8]に展開され、[1-7]と[1-8]においては、ニイチェとワグネルの関係に対比される。そのために、第1節は「モーツァルト」について書いてあるというよりは、「ゲエテ」について書いてあるように読めてしまう。これを「モーツァルト」全体として位置づければ、モーツァルトという謎の導入として使っていると言えるだろう。

プログラムは、このように文脈を自動的に辿って関連付けを行うことができるだろうか。その関連付けを如何に表現するかという問題もある。言葉のパターンの類似性、関連性とはどのように評価されるだろうか。人間は、表面的な文法的構造あるいは語の並びのパターンだけでなく、意味的なパターンを読み取っていると思う。意味を担うものは何なのか。

文を書く過程というのは、小林秀雄と同様、「僕はそんな思想とも音楽ともつかぬものを追って、幾日も机の前に坐っている。沢山の事が書けそうな気がするが、又何も書けないような気がする。」ような具合に、悶々と考え続けるしかないのであり、無論、偶然や確率に依存するのであろうが、その偶然や確率は、知識や、逆に言えば無知や、複雑さ、すなわち考えることの容易さや困難さ、その思考・思索の揺れ動きや思い付き・連想などに依存するのである。文を書く過程は、文を読む過程よりもはるかに複雑である。文を書く過程は、書いては読むという過程の繰り返しだからである。

• [心](#) (2006/08/15)

パースの意味の定義は「何か働かせてみるとある作用を及ぼす、その作用というものが意味である」ということである。文に人間を働かせてみると、すなわち読ませるとある作用を及ぼす。一種の連想、想起が生じるのである。それが意味であろう。

• [言葉と物 LXIV - 「モーツァルト」読解 第1節](#) (2007/09/23)

更新: 2007-12-16T08:28:20+09:00

12/16/2007 (Sun.)

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 LXXXXIX - 小林秀雄ジェネレータ

混沌の世界の続き。妄想にすぎない話ではあるが、小林秀雄の文章を生成するジェネレータを考えよう。

初期値となる一語なり数語をコンピュータに与えると、小林秀雄文章データベースにアクセスして、次に来る言葉を次々に選び出して並べていくというものである。小林秀雄の書いた文章をデータベース化して、ある語の次にはどの語が来る確率が高いかということ全体を調べておく。確率の高い順に並べるとどんな文章ができるかはやってみればわかる。助詞などの取り扱いをどうするのが問題になりそうだが、できないことではないだろう。意味がある文章が生成されるかどうか興味深い。

制約条件として文法構造を考慮することになるかもしれない。検索方法においても語の並びに注目して検索する場合があるわけで、語の並びには重要な意味がある。著者は同一でも作品によって言語空間は異なるかもしれない。「モーツァルト」について語るならば、「モーツァルト」言語空間なるものを考えるべきかもしれない。しかし、言語空間の構造とはどのようなものだろう。フーコーなど西欧の知性は普遍的な言語空間を想定することに躊躇いはないように思える。独自のものにせよ、言語空間をどのように設計するのか考えてみてもよいかもしれない。

これは僕の空想だ。そのような試みをするかもしれないし、しないかもしれない。

更新: 2007-12-16T21:27:51+09:00

[\[言語\]](#) 言語空間の構造

[言語空間の構造経由](#)、[ITmedia Survey:個人としての国際化対応\(2\)](#) [言語空間の構造](#) ネタ。元記事は、言語空間として、自己表出性、指示性、拡散性という三次元空間を考えているのだが、これは言語空間というよりは、コミュニケーション空間というべきかもしれない。

言説の伝染力が拡散性、言説の影響力が指示性、言説の求心力が自己表出性のようなものに関係するかな。コミュニケーション空間というよりはコミュニケーション力学か。

言語空間という言葉を使いきりすぎたかもしれない。Kohonenの自己組織化マップのような空間に言語をマップする試みはあるし、言語は **Small World** だという話もあれば、本サイトでも [txt2graph.pl](#) によるグラフ化も試みてきたが、我々の問題は、チョムスキーが「言語と知識 - マナグア講義録(言語学編) -」(産業図書、1989年、原著: 1988年)の第一章「議論の枠組み」にまとめたところによれば次の様である。

1. 知識のシステムとはどのようなものなのか。英語とかスペイン語とか日本語とかの言語を話す人間の心/脳の中には何があるのか。
2. この知識のシステムはどのようにして心/脳の中に形成されるのか。
3. この知識はどのようにして発話(あるいは書記などの二次的なシステム)において使用されるのか。
4. この知識のシステムおよびこの知識の使用の物質的基礎となる物理的なメカニズムは何か。

「モーツァルト」読解を元に、もう少し思索を深めよう。

- 更新日記記事の「グラフ」検索結果の一部
 - [\[Computing\]グラフ理論入門](#) (2005/02/06)
 - [\[本\]『複雑な世界、単純な法則』 - Small World 再び](#) (2005/03/19)
 - [\[A. I.\]脳的データベースの構造](#) (2005/03/27)
 - [\[Perl\]テキストのグラフ化](#) (2005/04/03)
 - [\[Perl\]テキストのグラフ化 II](#) (2005/04/05)
 - [\[SVG\]Batik SVG Toolkit](#) (2005/04/06)
 - [\[Computing\]GraphVizでグラフ理論のお勉強](#) (2005/04/07)
 - [\[SVG\]ZGRViewer](#) (2005/04/07)
 - [\[視覚化\]WinGraphviz入門](#) (2005/06/25)

言語の構造をグラフ化することが目的ではなくて、知識のシステムをどこまで外化できるかどうか

に興味がある。意味は、ある文か、文の配列が読まれて、脳にある記憶などと相互作用するときに生ずる。何か文や言語がグラフのようなものに視覚化されたとしても、そこから、文を読む以上の意味を読み取れなければ無意味なのである。

更新: 2007-12-17T21:04:13+09:00

1/5/2008 (Sat.)

[\[批評\]](#) 言葉と物 CI - 「モーツァルト」読解 III

『[\[情報処理\]言葉と物 LXXXXVI - 「モーツァルト」読解 II](#)』ではモーツァルト自体の古典主義時代における存在の意味のようなものを考えてみようとしかけたが、「モーツァルト」だけからは難しい。それは先で、「言葉と物」に立ち戻ったときに取り上げるかもしれない。ここでは「モーツァルト」に戻ろう。批評作品はどのような要素から成り立っているのだろうか。作者ならではの特殊性がある。それは物の見方、世界の捉え方の問題だろう。作品を成り立たせている要素を様々な角度からさらに探っていこう。

小林秀雄の作品の人称は必ずと言ってよいほど(それほど読んでいないわけではないので、それほどではないかもしれないが)、「僕」である。客観性を確保して、一見合理的な見解であると主張するかのような視点はどこにも見当たらない。

第1節の最後([1-9])に最初の方の「僕」が登場して([\[淵一博\]言葉と物 LXXXXVIII - 混沌の世界](#))、第2節は「僕」だけである。

・・・一体、今、自分は、ト短調シンフォニイを、その頃よりよく理解しているのだろうか、という考えは、無意味とは思えないのである。

[2-1]

なぜ「無意味とは思えない」のか、「まあ、それは勝手だけど」とは読者は思うが・・・

・・・ト短調シンフォニイは、時々こんな顔をしなければならぬ人物から生れたものに間違いはない、僕はそう信じた。何という沢山な悩みが、何という単純極まる形式を発見しているか。・・・

[2-2]

これは主題である。ヨゼフ・ランゲのモーツァルトの肖像画から引き出された話であるが、自分がどう感じたか、どう思ったかを主張するのが小林作品の骨格である。論理ではない。そんなことを感じている。

- ・ [言葉と物 LXXIX - 「モーツァルト」読解 第2節 \(2007/11/09\)](#)
- ・ [言葉と物 LXXXXVI - 「モーツァルト」読解 第7節 \(2007/11/25\)](#)

・・・ほんとうに悲しい音楽とは、こういうものであろうと僕は思った。その悲しさは、透明な冷たい水のように、僕の乾いた喉をうるおし、僕を鼓舞する、そんな事を思った。注意して置きたいが、丁度その頃は、大阪の街は、ネオンサインとジャズとで充満し、低劣な流行小歌は、電波の様に夜空を走り、放浪児の若い肉体の弱点という弱点を刺激して、僕は断腸の思いがしていたのである。

[2-2]

この節の冒頭にはト短調シンフォニイの第4楽章の冒頭部分の楽譜が置かれていて、その後、「も

う二十年の昔の事を、どういうふうに思い出したらよいのかかわからないのであるが・・・」と始めるのであるが、「モオツァルト」が発表された昭和21年を遡ること20年と言えば、小林秀雄24歳の頃(大正15年)ということになる。その頃、ジャズが日本にあったのかと少し疑問に思ったので調べると、[ジャズ - Wikipedia](#)には、そのような記載がある。

1923年(大正12年)4月に日本で初めてのプロのジャズバンドが神戸で旗揚げした。宝塚少女歌劇団オーケストラ出身の井田一郎をリーダーとするラフフィング・スター・ジャズバンド(ラフフィング・スターズ)である。その後1925年(大正14年)に井田は大阪でチェリーランド・ダンス・オーケストラを結成し活動するが、大正天皇崩御を理由に大阪市がダンスホールの営業を1年間停止したため、大阪を拠点としていた井田や南里文雄ら多くのプロのジャズマンは東京に拠点を移していった。・・・

(Wikipedia、「ジャズ」、「日本における歴史」)

このように見てくると、当然のとながら、書かれたものの背景には時代性が垣間見えてくる。

思い出しているのではない。モオツァルトの音楽を思い出すという様な事はできない。それは、いつも生まれたばかりの姿で現われ、その時々 of 僕の思想や感情には全く無頓着に、何というか、絶対的な新鮮性と言うべきもので、僕を驚かす。・・・

[2-3]

「思い出しているのではない」は冒頭の「どういう風に思い出したらよいかかわからないのであるが」に照応しているように感じられるが、正確には意味的に対応していないようにも思える。

モオツァルトの音楽に夢中になっていたあの頃、僕には既に何もかも解ってはいなかったのか。若しそうでなければ、今でもまだ何一つ知らずにいるという事になる。どちらかである。・・・

[2-4]

結局、どちらなのだろうとは思いますが、解っているから書いているのだろうと判断される^;))

最初、どの人称で語るかという話題を出したが、調べてみると、「僕」だけではない。「私」もあるし、「僕等」もあるし、「彼」で通す場合もある。「本居宣長」の冒頭が「僕」のオンパレードだったので、そして、そこに「モオツァルト」と同質のものを感じたので、最初のようなことを推定で書いてしまったわけだ。例えば、これまでに言及した「ニイチェ雑感」(昭和25年、1950年)は「私」である。「ランボオ I」(大正15年、昭和元年、1926年)は「彼」で書かれ、最後に一度だけ「私」が現われるが、「ランボオ II」(昭和5年、1930年)はすべて「私」になり、「ランボオ III」(昭和22年、1947年)では「僕」、「僕等」、「彼」が混在しているが、主は「僕」である。

四年たった。

若年の年月を、人は速やかに夢みて過す。私もそうであったに違いない。私は歪んだ。ランボオの姿も、昔の面影を映してはいまい。・・・

(「作家の顔」、新潮文庫、1970年改版、186ページ、「ランボオ II」の冒頭部分)

更新: 2008-01-06T21:52:02+09:00

1/12/2008 (Sat.)

夜の想像の闇を通して、低く深く、感情のない打楽器のように、雨が天窓を小刻みに打ち続ける。僕は耳を澄ませて聞き入る。手元には、小林秀雄全作品（新潮社）28巻+別巻4のうち、15モオツァルト、別巻1感想(上)、別巻2感想(下)の三冊がある。「モオツァルト」は、OCRで読み込むために良好な印刷状態を期待したのが第一だったが、むしろ1946-1948年当時の「モオツァルト」以外の小林秀雄の思考を知ることができることのほうが重要であった。編年体の全集は作家の思索の跡を辿るのに便利だ。別巻1,2に収められた「感想」（1958-1963年）は、前にも述べた収録が禁じられていたベルグソン論である。

- 更新日記記事の「ベル[グク]ソン」検索結果の一部
 - [\[脳科学\]真の記憶は脳の機能ではない](#) (2007/02/10)
 - [\[茂木健一郎\]新「学問のすすめ」](#) (2007/02/11)
 - [\[立花 隆\]記憶の外部化、神経接続、サイボーグ](#) (2007/02/11)
 - [\[哲学\]真の記憶は脳の機能ではない II](#) (2007/02/12)
 - [\[本\]「意思」の生み出す時間](#) (2007/02/18)
 - [\[ミシェル・フーコー\]言葉と物 VIII - ベルグソン](#) (2007/02/18)
 - [\[哲学\]真の記憶は脳の機能ではない III - 物質と精神の間](#) (2007/02/18)
 - [\[日記\]言葉と物 IX - 攻略法](#) (2007/02/20)
 - [\[千夜千冊\]小林秀雄の哲学](#) (2007/12/30)

小林秀雄の「モオツァルト」は自信作であったようだが、「感想」はなぜ失敗作だったのだろうか。5年間も新潮に連載され、未完に終わっている。「感想」の最初には、茂木健一郎氏の「脳と妄想」にも引用される「おっかさんは、今は虫になっている」という話が出てくる。このように自分の体験を書き込むのは小林秀雄の批評の特徴である。「モオツァルト」においては第2節が代表的な部分である。「本居宣長」（昭和52年、1977年）にも最初の部分に自分の体験が書かれている。

今、こうして、自ら浮び上がる思い出を書いているのだが、それ以来、私の考えが熟したかどうか、怪しいものである。やはり、宣長という謎めいた人が、私の心の中にいて、これを廻って、分析しにくい感情が動揺しているようだ。物を書く経験を、いくら重ねてみても、決して物を書く仕事は易しくはならない。私が、ここで試みるのは、相も変わらず、やってみなくては成功するかしないか見当のつき兼ねる企てである。

（「本居宣長」、[1-2]、新潮文庫：8ページ）

この部分は「モオツァルト」の次の部分に照応して思い出させた。

・・・モオツァルトの事を書こうとして、彼に関する自分の一番痛切な経験が、自ら思い出されたに過ぎないのであるが、一体、今、自分は、ト短調シンフォニイを、その頃よりよく理解しているだろうか、という考えは、無意味とは思えないのである。

（「モオツァルト」、[2-1]、新潮文庫：12ページ）

「感想」とは「感じて想う」こと、すなわち、体験(経験かな^;)である。書かれていることはなんらかの体験についての記述であり、解釈であるだろう。しかし、批評の対象となっている書かれていることのすべてを自ら体験に対比させて批評することは困難であろう。さらにそれを上回ることは難しい。上回っているなら読む必要もないかもしれない。ざっと「感想」を走り読みして感じたのは、個人的体験が書かれているのは最初だけだということ。「モオツァルト」は体験を適度に織り込みながら書かれているかもしれない。「感想」では、言葉の循環運動に捉われたと感じたのかもしれない。

「感想」においては、先に進むにつれて、小林秀雄の哲学とベルグソンの哲学が分離できず溶け合っていくかのようにも思える。どこからどこまでがベルグソンの言ったことで、小林秀雄の付け加えた部分はどの部分かがわかりにくくなっていく。後半は、批評というよりは哲学のスタイルで書かれて

いる。ベルグソンが小林秀雄に乗り移っていく過程のようにも思える。考えが近いものを批評することは難しいのかもしれない。松岡先生が「小林の哲学の70パーセントはベルグソンである」と言われたのは、なるほどそのような意味なのだろうかと思った([小林秀雄の哲学](#))。「モーツァルト」読解レベルの読解をしなければ、それほど明らかではないかもしれないが、「感想」は長すぎる。

「モーツァルト」は11節、全作品上では、57ページに対して、「感想」は56節、438ページである。

・・・もし、そういう所謂哲学上の大問題が、言葉の亡霊に過ぎぬ事が判明したなら、哲学は「経験そのもの」になる筈だ、とベルグソンは考えた。・・・

(「感想」、[2-3]、小林秀雄全作品 別巻2 感想(上): 20ページ)

更新: 2008-01-12T12:41:31+09:00

1/14/2008 (Mon.)

[\[小林秀雄\]](#) 言葉と物 CIV - 「モーツァルト」読解 IV

今日は外は9°Cぐらいで少し寒かった。正月気分は先週で抜けて、郵便ポストも年賀状の投函口を普段のものに戻している。「モーツァルト」読解も今日読み返してみると、書くべきことはそれほど残っていない。読み返して少し気になった部分を指摘して一旦終了しよう。

作品の構成要素について新しい見方があったかということ、作品内部においてそれほどあるわけではない。作品中に出現する固有名詞については作品中で説明がない限りは、知識がないと理解できないだろう。特に音楽作品については聴いたこともないのでは、そういうものなのかと受け入れたとしても、理解したことにはならない。引用される他の批評や伝記などの作品や手紙などについては、言葉によるものなので、作品内部である程度説明可能であるが、出典に当たる過程でこそ、新しい世界を知ることができて、さらに作品の理解を深めることができる([「モーツァルト」読解 I](#))。機械的に作品を理解し、表現する方法として、固有名詞を分類し、作品の進行に合わせて並べる試みもしてみた([「モーツァルト」読解 II](#))が、実際の作品の構造はそのようなことぐらいでは表せないことに気付かされるだけである。

[第3節](#)の最後の部分、「・・・しかし、これを語るモーツァルトの子供らしさという事になると、子供らしさという言葉の意味の深さに応じて、いろいろ思案を廻らす余地がありそうに思える。問題は多岐に分れ、意外に遠い処まで、僕を引っ張って行く様に思えるのである」は、ここでこれについては終わるのか、後につながるのか少しわかりにくい。直接的には、すぐ後の[第4節](#)にある「モーツァルトの可愛らしい上着」、「失語症の神童」、「永遠の小児モーツァルト」に照応しているのだろうと思われるが、「子供らしさという言葉の意味の深さに応じて」とか、「問題は多岐に分れ」がどのように照応するのかは不明である。

[第10節](#)([第10節](#)、[第10節 第9段落](#))や[第11節](#)に書かれていることすべてになるほどと思えるほどに理解できる人がどれくらいいるか、わからないが、特に[第10節](#)の最後([第10節 第10段落以降](#))、次の部分は唐突に思えた。

人生の浮沈は、まさしく人生の浮沈であって、劇ではない、恐らくモーツァルトにはそう見えた。劇と観ずる人にだけ劇である。どう違うか。これは難しい事である。モーツァルトとワグネルとのクロマチスムの使用法は、形式の上では酷似している。耳を澄まして聞くより他はない。

([10-17]、新潮文庫、49ページ)

「人生の浮沈」と「クロマチスムの使用法」がどのような関係にあるか。関係ないのだろう。耳を澄まして聞くより他はない。

「モーツァルト」読解は作者の小林秀雄を通じて、「ニーチェ雑感」([小林秀雄の知の構造](#)、[第2節](#)、[シュウマン](#))、「ランボオ」3編([「モーツァルト」読解 III](#))、「感想」、「本居宣長」と拡がりを見せ、フーコーの「言葉と物」に戻っていくかに見える。気まぐれな読解の旅の先には、何が待ち受けているやら楽しみである。

更新: 2008-01-14T09:21:37+09:00

Afterword

約4ヶ月掛けて書いた文だが、関係のあるレコードを購入して聞いてみたり、モーツァルトの肖像画に当たってみたり、ランボオの詩を探してみたり、小林秀雄の他の著作を読んできたり、WikipediaなどのWebの力を十分に活用して調べるのが楽しい作業だった記憶がある。たまたま明日の9月22日はこのシリーズを書き始めて一周年の日である。この日記を読み返して何か新しい展開のきっかけになればと期待している。

2008年9月21日
jscripiter